

町民が語り合える
居心地のいい飲食店を
ふるさとで営む日のため。

高桑 春香 さん

(震災当時 浪江小学校6年生・
神奈川県在住 22歳)



わが家は「縄のれん」という飲食店を営み、なみえ焼そばの元祖として知られていました。その味わいを求めて、町内の常連様はもとより遠方から足を運ぶお客様の姿もありました。手際よく次々と焼そばを作る父や、お客様とにこやかに話す母の姿が目につきます。3代続いた店も震災で3月11日を境に途絶え、一家で東京に移り住むことになりました。家で父が時々作ってくれる焼そばからは、変わらぬ味へのこだわりが伝わってきます。避難する時、真っ先に持ち出した店のレシピだけは今も大切に保管してあります。



なみえ焼そばが看板メニューだった店

店で働く父と母の背中を見て育った私には、ふるさとの浪江で飲食店を営みたい気持ちもあります。父と同じ味は難しいかもしれませんが、いつかなみえ焼そばを提供できたらと思います。少しずつですが以前よりも浪江町周辺へ戻る同世代の人たちが増えてきました。あと何年かかるかは分かりませんが、賑わいを取り戻した町で居心地のいい飲食店を営業できるよう、様々な経験を重ねているところです。小さい頃にいつも店で見えていた、町民が語り合える憩いの場所をいつの日かふるさとに作りたいと思っています。

一家で仲良く暮らした
町へいつか戻り
穏やかな時を過ごしたい。

中野 華子 さん

(震災当時 幾世橋小学校6年生・
福島市在住 22歳)



堤防の近くにあったわが家は津波で流され、わずかな基礎と割れた庭石だけが残りました。役場で働く父母と、定年後に農作業にいそむ祖父母、5つ上の兄の6人家族で、楽しい時を過ごした広々とした日本風の家屋。思い出の写真も3歳の時に撮ったひな祭りなど数枚だけになってしまいました。その後は、あちこち避難して福島市内のアパートに落ち着きましたが、父母は震災の対応に追われ不在がちで、不安を覚えながら避難先の中学校に通い始めました。そんな私を支えてくれた幾世橋小からの転入生2人には今も感謝しています。



家族と祝った3歳の時のひな祭り

町のために働く父と母を見て、大変そうだなと感じた時もありましたが、一方で尊敬もしていました。そのため、同じ公務員を目指す学科のある高校を選び進学しました。避難の際に温かく迎えてくれた恩に報いたい気持ちもあり、現在は福島市役所に勤務しています。自分にできることを着実にやり遂げて、定年まで働いていけたらと考えています。そして、できることなら定年後は浪江町に戻り、以前のように日本風の庭のある家に住み、穏やかな日々を送りたいと思っています。在りし日の祖父母のように、私も農作業にいそしみ、縁側でひと休みしたいものです。

当事者だからこそ
伝えられる震災の記憶を
自分の言葉で語っていききたい。

横山 和佳奈 さん

(震災当時 請戸小学校6年生・
宮城県在住 22歳)



請戸漁港のすぐそばにあった家のベランダから見渡す穏やかな海と活気のある港が好きでした。請戸漁港では、近所の子どもたちがハゼ釣りをしたり、サッカーをしたり、格好の遊び場でした。年に一度の「サンドアート」という学校行事で船やタコを作ったのも請戸の浜辺でした。震災後に押し寄せた津波で自宅は跡形もなく流され、祖父母は帰らぬ人となってしまいました。避難先の郡山市で通い始めた中学校は、請戸小と比べて生徒数が格段に多く、圧倒され不安でいっぱいでしたが、スクールカウンセラーの方と話し心が楽になったことで、大学で専攻する



2階のベランダから眺めた請戸の海

心理学を学ぶきっかけになりました。

高校3年の時に、福島県内の小学校を訪ね上演する「請戸小学校物語」という紙芝居の語り部ボランティアを始めました。皆さんが苦労して作り上げた紙芝居を、身を以て体験した請戸小の児童だった私が披露しなくてはと感じたからです。当事者だから伝えられる震災の記憶があると思います。あの震災は、経験していない人にも伝え続けていかなくてはならない出来事だったと思います。心理学の知識を生かし、当事者同士話し合うことで、心の負担を少しでも軽くできたらと考えています。

より多くの若者が
暮らしたくなる
「新しい浪江」をお手伝い。

山田 拓実 さん

(震災当時 大堀小学校6年生・
浪江町在住 22歳)



大堀小での卒業式を翌週に控え、教室で帰り支度をしているときに震災に遭いました。泣きながら親が迎えに来るのを待っていたことを今も覚えています。震災でたくさんの方に支援していただき、恥ずかしがり屋だった私も感謝の気持ちを言葉にして伝えられるようになりました。中学校は福島市、高校はいわき市、専門学校は東京都と住居を転々としましたが、いろいろな人との出会いが私を成長させてくれました。

小さい頃からよく面倒を見てくれた祖父母からの案内もあって、浪江町のいこいの村なみえで働き始めて3年、仕事にも慣れ皆さんに顔を覚えてもらえるようになりました。顔見知りが増えるにつれ、毎日の仕事を通してこの町の復興を支えているという実感が湧いてきました。

浪江を訪れるお客様を温かく迎えて、町を知るきっかけにしていだければと思っています。復興が進む町の様子を今まで以上に発信していくことで、住民の数も増えていってほしいです。特に同世代が増えてくれればうれしいです。夏祭りや芋煮会など気軽に集える催しを開催して賑わいを生み、若者たちが暮らしたくなる新しいまちづくりのお手伝いをしていきたいと考えています。



卒業証書授与式 (2011年7月 福島県男女共生センター)

駅伝のように一歩ずつ。
自分にできることで
復興の役に立ちたい。

佐藤 宏紀 さん

(震災当時 荻野小学校6年生・
大玉村在住 22歳)



小学6年生の時に参加したロードレース大会

震災当日は自宅におり、翌朝津島に避難しました。それから二本松市に移り、同市の中学校に入学しました。学校には知り合いもおらず、「自分は被災者なんだ」という馴染めない感覚、疎外感がいつも心の中にありました。

小学校の頃から陸上競技を始め、中学でも打ち込み、陸上の強豪・田村高校に進みました。ふくしま駅伝には、浪江町チームの一員として中学生の時から出場しています。初出場からずっと、自分が走ることで浪江町の方々を励ましたいという思いでレースに挑んでいます。高校卒業後は大学で箱根駅伝を走るという夢もありましたが、将来は車関係の仕事に就こうと考えていたので専門学校に進み、今春から自動車の整備士として勤務する予定です。この仕事を通して浪江出身の皆さんのお役に立てればうれしいですね。

自分が小学6年だった頃の浪江町は賑やかだったので、あの頃に少しでも戻ってくればうれしいです。帰還した皆さんにも頑張っていたらいい、もちろん自分も何らかの形で協力できればと思っています。同級生にはそれぞれの道で頑張ってもらいたい。どこにいても、みんなで浪江町の未来を応援しましょう！

いい思い出がつまった
ふるさと浪江の
環境整備に尽力したい。

小丸 顕吾 さん

(震災当時 浪江中学校3年生・
福島市在住 25歳)



中学の仲間たちと一緒に

3月11日は卒業式を終え、友人とファミレスで注文したメニューを待っていたところでした。倒壊した何軒もの建物を横目に急いで自宅に帰ると、家の中は食器や物が散乱していました。片付けが大変だなと思っていたら、翌朝には津島に避難することに。2歳上の兄が大学受験を控えており、その後家族と共に東京へと移住。私も4月から兄と同じ都立高校に通い始めました。浪江とは異なる環境とレベルの高い授業。必死に勉強しないといけませんでした。志望大学に進み希望していた福島県の職員になることができました。

高校、大学と進むにつれ東京の暮らしに慣れても、生まれ育ったふるさとのことがいつも心のどこかにありました。恋しくなると自転車で行けた大好きな海、友だちと遊んだ川や山の豊かな自然、取れたてのおいしかった海の幸など、どれもいい思い出ばかり。一度は離れた福島県ですが、震災避難を経験した者として、安心して暮らせる福島県の環境整備に尽力したいという思いがあり、戻ることを決意しました。県職員として浪江町に赴任することになったら、町民の皆さんの役に立てよう頑張って一つ一つの仕事を覚えていきたいと思っています。

町子どもたちに
長く親しまれてきた書店。
その足跡を未来につなげたい。

Message 07 蒔田 智裕 さん

(震災当時 浪江東中学校3年生・
東京都在住 25歳)



私の家は浪江小学校の前で「ほていや書店」という書店を営んでいました。本以外に文具や雑貨なども置いてある、小学校の購買部代わりのような存在でした。曾祖父が開業し、父で3代目。小さい頃自分も大人になったら本屋になると言っていました。震災で店はめちゃくちゃになって解体され、現在両親は郡山市に住んでいます。しかし、今も浪江町に通い、昔からのお客様に本の配達を続けています。店舗はなくなりましたが、人との結びつきはつながっているんだなあと感じます。

帰省時には、時々父の配達に同行して浪江町に



何年も震災当日のままだった書店內

足を運びます。少しずつ新たな街並みができていて、母校である浪江東中学校の跡地には、なみえ創成小学校・中学校が建ちました。ほていや書店4代目としては、その門前に店舗を構えたいところです。それが難しくとも、何らかのかたちで町の人たちに本を提供したいという思いがあります。システムエンジニアという現在の職業を生かし、ほていや書店のECサイトを作ることができるかもしれません。そんな思いを胸の片隅に持ち続け、できることをやっていきたい。そうすることが故郷・浪江町への応援につながっていると思っています。

伸び伸びと過ごした
津島の思い出を大切に
これからの人生を歩みたい。

Message 08 石井 裕平 さん

(震災当時 津島小学校6年生・
福島市在住 22歳)



2歳半の頃、仲良しの兄と家の庭で

津島小学校は、全学年合わせても60人ほどの児童数の少ない学校でした。私たちの学年はちょうど10人、気心の知れたクラスメートばかり。4月からは、全員が津島中学校に進学するはずでしたが、私たち家族は福島市に避難することになりました。転入先の中学校は5クラスで、津島小の馴染みの顔は見当たらず、浪江町からの転入生も1学年に数えるほどでした。学校生活に慣れるのに少し時間がかかりましたが、新しいコミュニティでのつながりから刺激を受け、好きな工学系の道に進むことができました。

津島の自宅は山の中にあり、これこそ田舎という場所でした。隣の家まで数百メートル、いくら騒いでも迷惑がかからず、2歳上の兄と毎日好きなだけ遊んでいました。車のおもちゃに乗って走り回ったり、庭でキャッチボールしたり、山で虫取りしたりと、幼い頃の楽しい思い出がたくさんあります。そんな津島にはいまだに住むことができず、荒れ果ててしまった家は解体する予定です。卒業式や成人式など、節目節目で津島のことを思い出します。この春から群馬で自動車関係の仕事に就きますが、ふるさとの思い出を大切にしながら、自分らしくこれからの人生を歩んでいきたいと思っています。

いまは幸せ。でも
いつも心のどこかに
津島がある。

北澤 雅貴 さん
(震災当時 津島中学校3年生・
郡山市在住 25歳)



震災後の一時帰宅時に撮影した自宅

3月11日は卒業式を終えて家にいました。相
双地区の高校に進学予定でしたが、二本松市に避
難。転校して同市の高校に5月から通いました。
新学期が始まってから1カ月が過ぎていたので
最初はとても不安でした。本当にゼロからのス
タートでした。中学時代の思い出といえば自転
車通学。片道8kmあり、平坦な道ではなくてず
っと上ったり下ったりで、当時は辛かったのですが、
震災後に一時帰還して道を通った時は「懐かし
いな」という感情が湧いてきました。

震災は大変なことでしたが、妻とは進学した福
島市の大学で出会い、いまは両親から独立して新
築の家で暮らしています。避難によって今の妻
や友達にも出会えたし、自分の新たな可能性が開
けたと感じています。

移住して10年という歳月が過ぎましたが、い
つも心の中にはふるさとがあります。住民票は
移してしまったら縁が切れてしまう気がして、い
まだに津島のままだにしています。両親や祖母
もずっと津島に暮らしていました。今の自分
があるのもあの環境で育ったおかげなので、いつか
当たり前のように帰れるようになった時に、妻や子
どもに津島を見せてその良さを語ってあげたいと
思っています。

若者が伝える、
私の3.11

あの日の思いを、
未来を咲かせるチカラに――。

